

「カチユーシヤか、さあお入り、先刻から待つてゐたよ。」と大急ぎで開けてやると、扉の前には復活祭の白の暗衣に、赤いリボンの簪をさしたカチユーシヤが、タオルと石鹼と美しい花束を持つて佇つてゐた、石鹼は伯母からだか、花束はカチユーシヤの心を籠めた贈物であつた。

ネフリユドフは受取つた花をなつかしさに嗅ぎながら、

「おや、この花はお前が呉れたのだね、どうも有難う、どうも有難う。」

「つまらない花しか集まらないのですけど……でも少しは香ひが

ございますわ。」とカチユーシヤは恥かしげに「もう遅うございますから、私、行きますわ、おやすみなさい。」と言つて男の寢室を出て行かうとする。

「可けない、可けない、さう情なくしなくても可からう、お前に行かれると淋しくつていけないから。」

さう言ひながらネフリユドフは、突然後方からカチユーシヤの頸に接吻した。

カチユーシヤは恥かしさに眞赤になつて泣出した。

「何をなさいますのよ……あなた可けないぢやありませんか？」

放しにください、さあ後生ですから放してくださいよー いゝえよ  
 かありませんー よかありませんー」  
 けれど、男は容易に放さなかつた。

「これカチューシャ！ お前はそんなに私が嫌ひなのか？ 私はも  
 つと私を愛してゐてくれると思つてゐたのだ、私が戦地へ行く前に  
 こゝまで来たのはたゞお前の顔が一目見たいばかりだよ。今か  
 ら二年前私が始めて伯母を訪ね、あの連翹の蔭でお前に接吻したこ  
 とを忘れたかい？」

「いゝえ、私だつて彼の時のことを好く覚えてますわ！」

「それを忘れなかつたら、最う暫く此室で話をして行つてもいゝだ  
 らう。」

男女は對座つて窓に腰をかけた。月光は水のやうに流れて、森の  
 後の川から氷の碎ける音が聞えて来る、唯、何處からともなく鐘の  
 音がして、一番雞の鳴く聲がした。

「實にたまらなく好い景色ぢやないか、かうしてお前の手を取つて  
 この景色の中を何處までもく歩いてゐたい！ おやく、田甫に  
 はまだ人が大勢ゐるやうだね。」

「あれは隣村の人達が復活祭の火を燃やしに来たのでせう。」

「その前でみんな歌を唄つてるやうだね。」

「そしてお終ひにお祈りを言ふと、それが一年経たない内に叶ふのださうでございますの。」

「お前も一つ歌をお唄ひ、そしてお祈りして願をかけやうよ。お前の名を入れた歌をお唄ひ。」

男から頼むやうに薦められて、カチューシヤは些と考へたが、すぐ軽く手を拍ちながら、

カチューシヤ可愛や

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と

神にねがひをかけませうか

もう一度繰返して、今度はネフリユドフも一緒に手を拍ち低い聲で唄つた。その歌が終ると、男は女に對つて迫るやうに言つた。

「さあ歌を唄へば、もう一つ復活祭の儀式があるだらう。私とお前と唇に接吻すること、今日はみんな平等なのだから。」

「いゝえ、他人は額に接吻するものですよ。」

「いや、私とお前とはもう他人でない意りだ。」

「でも、明日は戦地へお立ちなされるんぢやありませんか、また何時

お目にかゝれるか分らないものを、今夜きりにそんなことをなすつて残酷ですわ。あゝ、私何うしたら可いでせう？ 私もう行きますわ、いゝえ、行かなくつちやならない、行かなくつちやならない。」と女は涙聲であつた。

ネフリユドフは凝然と女の目を瞞めた。

「そんなに……お前は私が憎いのか。憎いならもう可いから出て行くがいゝ。」

さう言はれると、カチユーシヤは男から離れることが出来なかつた。男の胸に頭をあてゝ、

「私、やつぱり行かれませんが、行かれませんが。」と激しく啜り泣いた。

其夜からカチユーシヤは最う處女ではなくなつた。

想ひを遂げた青年士官ネフリユドフは、伯母の家を出立際に、百圓札を一枚カチユーシヤの懐中へ捻込んで去つた。

五月經つて、カチユーシヤは懷妊になつた事に氣が注いた。そして、毎日男の歸りを待ち焦れてゐた。ところが、戦地から戻つたネフリユドフは、聯隊の命令に依つて、途中で下車する事が出来ない

と云ふ電報を伯母の許へ寄越した。

それと知つたカチユーシヤの悲嘆はどんなだつたらう？ 彼女は男に逢ひたさの一念で、夜中の二時に汽車が此村の小驛を通過すると云ふので、主人達の寢静まるを待ち、生暖かい雨の夜道を漸くの思ひで停車場へ驅着けた時には、二度目の發車の鈴が鳴つた處で、汽車は靜にプラットフォームを搖ぎ出でた。

カチユーシヤは、明るい一等室にちらとネフリユドフの顔を見たばかり、汽車は矢の如く駛り走つた。其時の男は大勢の友達と一緒に、さも愉快さうに骨牌を取つて、女の事などは思ひ出しもしない

やうな様子であつた。

カチユーシヤは雨の中へベタツと座つて、

「あゝ往つてしまつた、あゝ往つてしまつた。」と許り泣き崩れたのであつた。

( 11 )

光陰の經つのは疾いものである。それから十年過ぎた。

四月の二十八日午前八時、モスコウ巡廻裁判所では、男囚一人女囚二人の裁判があつた。

事件の内容は、スメルコフと云ふ西比利亞の商人が、ある賣春婦と關係をつけた。遊興の金が足りないので、その賣春婦に鍵を渡して、自分の泊まつてゐる旅館の部屋に置いてある鞆から金を持つて來させ、それで料理店の支拂を濟ませた上、敵娼の女を連れて旅館へ歸つたが、客がしつゝこい眞似をするので、女は喧嘩をして撲られて櫛を折られた。客も氣の毒と思つてか、仲直の印に自分の箆めてゐたダイヤ入の指環をくれた。そこへ旅館の雇人カルニチンキンが睡眠薬だと云つて一包の藥劑を持つて來た。何うかして客の傍から逃げ出さうと思つてゐた女は、其藥をシャンパンに入れて客に服

ませた。客のスメルコフはそれがために死んだ。金品は紛失した。そして旅館の雇人カルニチンキン、ポオチコワ並びに賣春婦が其筋に拘引られた——今日は其の毒殺事件の裁判當日である。露西亞の習慣で、かう云ふ裁判には、土地で有名な人々が陪審員として列席することになつてゐる。公爵ドミトリー・イワニツチ・ネフリユドフもその一人であつた。ネフリユドフは、昨夜モスコで有名な金持の貴族コルチャアギン家で夜を更した。その令嬢とネフリユドフとは、旋て結婚するものゝやうに人々から噂されてゐるのであつた。

朝、やはらかい床の中で目を覺ましたネフリエドフは、昨夜の約束を思ひ出した。それは今日彼の令嬢と美術館へ行く事であつたが、其處へ令嬢から手紙が届いて「今日は美術館行のお約束を致し候へども、よくよく考へ候へば、あなた様は陪審員として裁判所へおいで遊ばすお日取と心注ぎ申候。その代り裁判所の御用濟み候は、私宅へお越しくだされ度く、その時刻見はからひ裁判所までお迎ひにまゐり申候」と書いてあつた。

それで初めて今日は毒殺事件の裁判當日だと思ひ出し、ネフリエドフは出頭時刻に間に合ふやうに、馬車を驅つて裁判所へ向つた。

愈よ開廷となつた。裁判長が一通り書類を調べて被告を呼入れた。男囚と二人の女囚が出廷した。

女囚の中でも主犯者と目されてゐる賣春婦は、小柄な、肉付の好い二十七八の女で、白い下着と下袴に鼠色の上着を被て、頭には白い手帕を巻いてゐたが、眞黒な髪が少し流れて額にかゝつてゐた。黒い眼が活々として、男惚れのする好い縹緖であつた。

裁判長はカルニチキンとポオチコワを型の如く訊問した。それが濟むと今度は賣春婦の順番だ。裁判長は嚴かな句調で、  
「其方の名は？」と訊ねた。

「カチユーシヤと申します。」と賣春婦は憶せず答へた。

それを聞いた陪審席のネフリユドフは愕然として女囚を見た。

裁判長は委細構はず訊問をつづけた。

「職業は？ 其方の職業は？」

カチユーシヤは俯いた。

「其方の職業は何か。」と重ねて訊かれて、

「私——商賣をしてました。」とカチユーシヤは顔も赤めず言つた。

「何の商賣か。」

「——あら旦那、御存知の癖に。」

其の一言で、傍聴席でクスリと笑つたものがある。すると、それに誘はれて法廷は驀然と笑ひ聲で埋まつた。「叱ッ！」と押丁が制した。

けれど、陪審席のネフリユドフは笑ふ處の沙汰ではなかつた。最前からの奇遇に心を攪亂されて、被告の陳述が濟むと、蒼白な顔をして審議室へ踏け込んだ。

陪審員達は一同評議室へ退くと、茲でカチユーシヤの有罪無罪で議論百出、甲論乙駁、何時まで経つても果がないので、採決の結果、二人の多數を以て殺人犯カチユーシヤは有罪と決心した。



ネフリユドフは起上つて、

「それは實に慘酷です！ 私はこの事件の陪審員たる資格を斷つて被告カチユーシヤのため控訴をし、それで可けなければ上告でも上訴でもして、是非ともあの女の冤罪をそゝいで遣ります！」と熱心に辯護したが、もう遅時であつた。

カチユーシヤはこの宣告を聴くと泣き崩れて、他の被告が退廷した後までも動かすにゐた。

それがネフリユドフには可憐でならなかつた。もう金持貴族の令嬢と逢ふのも忘れて、

「俺は一刻も早くカチユーシヤを救つてやらなければならぬ！ それは俺の義務だ。」

裁判所を出ると、ネフリユドフは直ぐ名高い辯護士の許を訪れてカチユーシヤの爲め判決不服の控訴を依頼した。

十年前の悪夢から覺めた彼は初めて誠の人間に還ることが出来たのである。

「あの女の一生を認らしめたのは俺だ！ 俺が彼女の操さへ破らなかつたら、今日の墮落をさせずに濟んだのだ。俺はカチユーシヤに謝罪しやう、都合に依れば彼女と結婚しても可い。」

う思ひつゝ神に祈禱を捧げるネフリユドフの眼からは熱い涙が湧上つた。かくて、彼はこの懺悔に依つて、我が靈魂の淨まつて行くのを感じた。

(三)

モスコー監獄の薄暗い檻房には、一室に十五人の女囚が雑居してゐた。カチユーシヤが歸つて來た時は、未だ明るかつたので寢てゐるものは尠く、何れも茶の襟袖一つでベチャクチャ嘔り散らしてゐた。

有罪の宣告を受けて裁判所から戻つたカチユーシヤは、窓下のベンチに腰をかけ、両手で顔を埋めて黙つてゐた。其傍に亭主殺しのフヨードシアが、是れも無言で編物をしてゐた。やがて「お前さん、到頭西比利亞行かい。」と老女囚がカチユーシヤに話しかけた。

カチユーシヤは眞蒼な顔を上げて、

「あゝ、もう何も言つておくれでない、西比利亞だつて何んだつて構ふものか。行けと云ふなら何處へでも行くさ、私一人この世にゐるのがそんなに邪魔なら、何時でも來て殺すがいゝやね。」と捨鉢に

言つた。

「だつてお前、言ひぬけられるだけは言ひ抜けなくつちや馬鹿らし  
いよ。」

「私は何もした覚えがないんだから言ひ抜ける事がありはしない。  
たゞ私がこんな商賣をしてゐるばつかしに、皆んなで無理に罪人に  
落しちやつたんだよ。」

「兎角く世間は正直ものが馬鹿を見るんだよ。」

「私達の神様はもう疾くにゐなくなつたねえ、あゝこんな氣が快々  
する時はお酒でも呑まなくつちや遣り切れない。」

さう言つてカチユーシヤは、腰かけの下からヴオツカの酒瓶を取  
出し、一口喇叭飲みにして、

「さあ、皆んな景氣直しに一杯やらないかい。」

とその瓶を振つて見せた。

女囚達は餓鬼のやうに其酒を呑んだが、先刻から心配さうな顔し  
て、カチユーシヤの様子を眺めてゐたフョードシアが、

「姉さん、また其様に飲んちや體に毒よ！ もうお廢しなさいよ。」  
と制めた。

ヴオツカの利目は早く、カチユーシヤは好い機嫌になつて、

「これが飲まずにゐられるものかね、お酒さへ飲めばいゝ氣持になるんだもの。昔の事も今の事もみんな忘れちやつて……だが、今日は私まつたく驚いちやつたよ。私が罪人だなんて、ねえこの可愛いカチューシヤが人殺しだなんて本當に驚いてしまつた！ その癖みんなで話をしちやニコくして喜んでる癖に、みんな私に色目をつかつてゐたよ。」

「男といふ奴は意地きたなで、女さへ見れば直ぐ氣を持つんだよ。」と女囚の一人が相槌を打つた。

「だけど、それは當然のことかも知れないよ。一體世間の男はどん

なものでも好い女を欲しがらないものはなし、好い女はさうして欲しがられる爲に出来たのだから、精々欲しがらすやうにするのが當然だわ。私も今まで随分いろんな男に出遭したが、みんな私を欲しがらないものはなかつたよ。」

「さうだらうとも！ その話を聞かせて貰ひたいね。」と又た一人が言つた。

「あゝ聞かさうともさ。」とカチューシヤは乗地になつて「まづ第一番にね、私にねらひをつけて来たのは、私の育てゝいたいた別荘の若様でね、身分の高い人だつたよ。それがお前とうく私を手ご

めにして、翌る朝、百圓札一枚私の懐中へ押込んださきり行つちまつて、二度と消息もしなくなつたのだよ。」

——それからと云ふものは、カチューシャは捨鉢の女となつて、今まで面倒を見て貰つた主人に對しても口返答をするやうになつた果ては其家を飛出して、さる警察官の家へ奉公したが、其處の主人の五十男がカチューシャに附纏つて手込めにまでしさうにした。其時は主人を突飛ばして置いて逃出した。カチューシャは段々氣の暴い女になつて來た。さうかうする内に月満ちて子供を産んだ。初産ながら思ひの外輕かつたが、産後に流行病に取りつかれたので、子

供は孤兒院へ預けたけれど間もなく死んでしまつた。

彼女は、ネフリエドフから貰つた百圓と自分の稼ぎ溜めた金でお産の始末をしたので又た以前の無一物になつてしまつた。そこで再び奉公に行つた先はある林務官の家である。其家の主人もカチューシャに思召しをつけて無理に手に入れてしまつた。それが細君に知れて間もなく追出された。それから奉公しては追出され、逃げ出しては奉公したのも五軒や六軒ではなかつた。かうして居る中に若い男と出来合つて世帯を持つたが、男は商用をかこつけて間もなく何處かへ逃げてしまつた。置き去られたカチューシャはその頃から自棄

酒の味を覚え出した。

女一人で世帯を張つて行くには、何うしても淫賣の黄色い鑑札を受けなければならぬ。カチユーシヤは毎晩々々知らぬ男の慰みにされる事となつた。

その結果、今度のやうな冤罪を被て、怖しい監獄へ投込まれたのであつた。

カチユーシヤの身の上話がおしまひになると、女囚の一人がこんな事を訊いた。

「でも、それほど澤山な男の中だから、一人や半分は憎いと思はな

かつた男もあつたらうね。」

「今でも思ひ出すのは初恋だね。その公爵の若様だけは、其頃の初心な心でしみく可愛いと思つたけが、今から思ふと其の若様も薄情者だつたよ。」

そこへ看守が入つて来た。

「もう晩のお祈りの時刻だ。皆んな列をつくるんだ。」

女囚一同は列を作つて看守に連れ去られた。すると、別の看守に導かれてネフリユドフが入り來つた。

「囚人は今禮拜堂へ行つてますから、カチユーシヤだけ先へ戻らせ

ます、御面會の時間は十五分ですから其のお意りで。」  
さう言ひ置いて看守が去ると、間もなくカチューシャ一人で歸つて来た。

「あなたですの？ 私に面會したいと仰有るのは。」

ネフリユドフは胸を躍らせながら、

「さう！ 私だ、お前は私を忘れはしまいね。」

と言つた。

「貴下は誰方でしたつけ？ 私、ちよつとも思ひ出せませんよ。」と女はまぶしさうな眼付した。

「裁判の時陪審席にゐたが、お前はちとも氣が注かなかつたかい。」  
「え、誰方だかさつぱり分りませんよ、一體何と云ふお名前？」  
「カチューシャ！」と男は堪らなくなつて「あゝカチューシャ、お前には私に分らんのか、私はネフリユドフだよ、あの十年前の復活祭の晩の事を忘れたのか」

カチューシャは凝然と男を睨めたが、見る間はその眼は涙で一杯になつた。

「あゝ！ 貴下は悪魔だ、薄情者だ、私がこんなになつたのを見物に來たんだね、こんな悔しい恥かしい思ひをさせられて……あゝ私

逢ひたくない、逢ひたくない。」

「私は實に申譯のない事をした。十年前のお前に對する不始末があの裁判を見て空恐しくなつて來た、私はお前が冤罪だと云ふことも能く知つてゐる。」

冤罪ですともさ！ その冤罪で私は西比利亞へ送られなくつちやならなくなつたんです。」

「いや、控訴すれば何んとかなる、私はその意りで辯護士に頼んで置いた。」

「それは濟みませんのね。」と女は俄かに卑しい作り笑ひして「何う

か宜しくお頼みますよ。」

と軽く男と握手して別れやうとする。

「その事は確かに引受けたから、書類が出來次第お前の名を書いて貰ひに來る。だが、お前はたいそれきりで別れるつもりかい、他に言ふことはないのかい？ 許すとも許さないとも、憎いとも懐かし

いとも？」

「そんな満らない事を！ 貴下も存外野暮な方ね。」と女はてんで相

手にならない。

ネフリユドフは眞面目だ「カチューシャ、どうかこれだけは眞面



目に聞いてくれ。私は今日限り地位も財産も棄て、お前を救ふためにお前と結婚しやうとも思つてゐる、あゝそれが私の神に對する義務だと思つてゐる。」

「そんな野暮な話はお廢しなさいつたら！ 私に御用があるなら十圓札一枚で結構、満らない事を言ふと御身分に障りますよ。」と憎さげに罵つて、カチユーシヤは泣き出した。

男は堅く決心した。

「あゝ俺が悪かつた！ 俺は必らずカチユーシヤを救つて、その眠つた靈魂を呼び覺して、今一度昔の清いカチユーシヤにして、その

カチユーシヤと結婚して、十年前の罪をつくのはなくつちやならな  
い！」

## ( 四 )

ネフリユドフの奔走で、やがてカチユーシヤは監獄病院の看護婦として移された、檻房内で懇意になつたフォードシアも一緒に。

このフォードシアと云ふ女は、まだ漸と十六になつたばかりの時見たこともない人の所へ無理に嫁にやられて、唯恐いばかりで泣いてのみゐた。ふと魔がさしたのだらう、とう／＼其の良人を殺して

自由にならうとした。そして捕はれた後、八月ばかり保釋になつてゐる間に、すつかり其人が好きになつて、何うか此事は願ひ下げにしたいと思つたけれど、もう間に合はず五年の懲役を課せられた氣立の優しい娘で、平素からカチユーシヤを姉さんくと慕つてゐたので、彼女から特に願つて、一緒に病院内で働く事となつたのであつた。

二女は椅子に腰をかけて丸薬を揉んでゐたが、フョードシアは偶々とカチユーシヤを見上げて、

「姉さん、あなたはよくお酒も煙草も一時に止されたのね。」と話した。

かけた。

カチユーシヤは莞爾して「もとから好きで呑み出した譯ぢやなかつたからさ。」

「それも彼の方の眞實が通じたのだわね、私までお蔭でこんな樂が出来ました。」

「ほんとにあの女囚室からこゝへ來ると清々する事ね。私、こんな白い前垂をかけるのは十年振よ、こんなさつぱりした風をしてると何だか昔のカチユーシヤに戻つたやうで、嬉くつて堪らないよ。二女が楽しく話合つてゐる處へ、小使に案内されてネフリユドフ

が入つて来た。

唯見ると、カチューシヤは待ちかねたやうに走り寄つて「よく被入つてくださつたのね、丁度今もお噂をしてゐたのですよ」

フヨードシアは其尾について「あなたが公爵様で被在いますか、私、こんな樂にして頂いてお禮の申しやうがありません。」

「禮なんか言ふほどの事はない、これもお前の心掛けが好いから病院でも許してくれたのさ。」とネフリユドフは慰め顔に言つて別室へ去らしめた後、カチューシヤの方に振向いた。

「今日は控訴の結果が分かる筈で、こゝで辯護士を待ち合はせる事

になつてゐる。」

「私、昔の自由な身になり度いーそして、本當に叶ふことなら……」とカチューシヤは嘆息まじりに呟いた。

「私は誓つてお前を自由な身にする。そしてお前の復活つた心で私と一緒になつてくれ。」とネフリユドフが力強く言つた時、

「辯護士がお出でなさいました。」と助手醫が告げに来た。

ネフリユドフが急いで出て行くと、豫ねてカチューシヤに岡惚れしてゐる助手醫は、四隣に人氣ないのを見済して色々口説き出したを、カチューシヤは一言の下に剣ね付けた。それが悔しさに助手

「醫は、折から見廻りに来た醫長に對つて、さも自分が女に口説かれて迷惑したやうな事を吹聴した。」

「あんな卑怯な、自分でした事を私に塗付けて、大嘘つき！ 大嘘つき！」とカチユーシヤは泣聲になつて助手醫を罵つた。

醫長は女囚の辯解などは信せず、辯護士と連立つて戻つて来たネフリユドフを顧みて、

「かう云ふ種類の女はどうも困りますね。」と辛い顔を見せた。

ネフリユドフは眉根に深い曇を見せて「解りました、解りましたでは暫く彼方へ。」と頼むやうに首を掉つたので、辛い顔の醫長は助

手醫を連れて立去つた。

カチユーシヤは悔しさうに唇を噛緊めてゐた。

辯護士は男女に對つて氣の毒さうに言つた。

「今日は面白くない報知を持つて來たのです、残念ながら控訴は却下されました。」

カチユーシヤは疾うから覺悟を極めてゐた。

「あゝさうですか、私も多分さうだらうと思つてゐましたよ。そんな事は何うでも好いとして、貴下に一言申上げて置きたいのは、今醫長さんの仰有つたことは決して私がしたのぢやありませんから、

それだけは悪からず思つて下さい。」

「あゝ、もうそんな事を言ふ必要はない、お前が何をしやうと自由に任せる、私はどんな事があつても、お前を救ふといふ決心は以前通りなんだから。」とネフリユドフは淋しく言つた。

カチユーシヤは情なさうに「貴下までがそんな事を仰有つちや私の立瀬がありません、ねえ、悪く思はないでください、あの助手めが私を女だと見くびつて……」

「もう好いと云ふに。」と遮つて「そこで控訴は却下されても、直ぐ上訴して特赦を願ふことにするから、この上訴書類に署名して下さい。」

カチユーシヤは願へる手で漸う書類に記名した。それを辯護士は受取つて懐中へ収めた。

ネフリユドフは重ねて言つた「上訴の結果の分かるまでには大分隙取らうから、お前は多分この十日の護送途に入つてシベリヤへ行かなくばなるまい。然し特赦されば直ぐ戻れるし、私もお前の途について行くから宿場々々では逢へやう、その卒抱もほんの一時と思つてくれ。」

「えゝ、もう私その事は些とも苦にしてゐますんから、何うぞ御心

配はなさらないやうに。シベリヤへ行かうが此處こゝにゐやうが、どうせ私わの身には變かりがないんですから。

「ぢや、これで當分たうぶん逢あへまいから。」とネフリユドフが言いへば、辯變べんご士しもまた、

「御機嫌ごきげんよう。」と袂別わかの挨拶あいさつ。

二人ふたりが出で行く教姿しやうすがたを、カチユーシヤは淋あしく見送みおくつた。

其處そこへ泣顔なきがほをしてフヨードシアが戻もつて來きた。

「姉ねえさん、貴女あなたはシベリヤへ送おくられるんですつてね、ほんとうですか。」

「あゝこれも身みに定さまる運うんなら仕方しかたがない！ 私わたしはシベリヤへでも何處どこへでも行いくばかりさ、たい今いままで妹いもうとのやうに思おもつてゐたお前まへさんに別わかれるのが辛つらいけど。」と言いひさして、カチユーシヤは潜然ほろりとした。

「私わたし、姉ねえさんのお別わかれにあの歌うたを唄うたつてあげませう。」とフヨードシアは低ひくいこゑで、

カチユーシヤ可愛かいあい

別わかれのつらさ

せめて淡雪あはゆきとけぬ間まと

神にねがひをかけましょか——

唯、カチユーシヤも涙聲で跡をついた。

カチユーシヤ可愛や

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と

神にねがひをかけませうか——

(五)

ある暑い日の拂曉、白服の護送兵を先に、徒刑囚、次が流刑囚、

追放人、女囚と云ふ順でモスコー監獄の門を出た。この一行はシベ  
リヤ指して三千哩の旅途に上つたのであつた。

カチユーシヤはベルム市まで普通刑事囚と一緒に汽車や汽へ乗つ  
たか、ネフリウドフの世話で國事犯の仲間へ入れてもらつた。

その中に九月になつた。冷たい風が吹くと、時折雪まじりの雨が  
降つて来た。國事犯の人々は最初こそカチユーシヤを排斥してゐた  
が、その經歷に似合はぬ清い心が分ると段々親切にしてくれた。さ  
うまでカチユーシヤを感化したのはシモンソンと云ふ革命主義者で  
ある。

「カチユーシヤさん、吾々は今こそ囚はれ人となつてゐるが、もう暫く経つと自由になります、其時こそ一緒に立派な事をして、可憐な囚人のために盡してやりませう、吾々がこれまで嘗めて来た辛苦艱難の結果を、生かして世の中へ應用しなくちや可けません、あなたの美しい顔にも、随分長い辛苦の痕が見えてゐます、今までは辛かつたでせうが、こゝまで来れば此先はもう落ちつこはありません、こゝで新しい生涯が開けるんです。」

「私も此頃何んだかそんな風に思はれて来ました。」とカチユーシヤは深厚と頷いた。

かう云ふ風に一つになつて病人などを世話して居るうちに、男女の間は段々接近して来た。

ある日ネフリユドフがカチユーシヤを訪ねて来た時、突然シモンソンは恚う言ひ出した。

「公爵！ 私は是非あなたに聞いて頂き度い事があります。」

「どんなお話か伺はう。」とネフリユドフは不安氣に相手を見た。  
シモンソンは強い言調で、

「それはカチユーシヤの事です、貴下とカチユーシヤとの關係はよく知つてゐますから、一應御相談するのが義務だと思ひまして……」



「實は私が彼女と結婚したいんです。」

「それはカチユーシヤも同意ですか？」とネフリユドフは驚いた。

「まだカチユーシヤの意志は聞いてみませんが、これから打明けやうと思ふ、其前に貴下のお心を確かめたいと思ふのです。」

「それなら何も改めて御相談なさる必要はありません、私は私の義務と信ずる事を行つて、カチユーシヤの負擔を軽くしてやれば済むので、その爲に彼女の自由を束縛する必要はありません。」

「公爵、私は決してカチユーシヤの色に溺れたのでありません、私はたゞ彼女を苦勞した立派な婦人として愛するのですから、これか

ら半生の苦勞を分ちたいと思ふのです、彼女の行くところへは、何處へでもついて行つて彼女の重荷を軽くしてやりたいと思ひます。」

「私は何んと御挨拶していゝか解らない。兎に角カチユーシヤを呼んでください、直接話して見たい事がありますから。」

シモンソンが頷いて小屋へ入カチユーシヤが出て來た。

「おゝ、カチユーシヤ！」とネフリユドフは其手を握り、片手でポケットから書類を取出して「今度いよくお前の上訴が聞届けられた」「請願局長は皇帝陛下の思召によりカチユーシヤ、マスロワが受けたる徒刑廿年の宣告を破棄し、シベリア附近の地方に於て一年間

の流刑に處す」と、これでつまり特赦と同じ事になるのだ。とうとも私達の望みが半ば成就した譯だ。」

「私ひとり他へ行かなくつちや成らないでせうか。」とカチユーシヤは沈んだ聲で聞き返した。

「それはお前の自由だが……私は今シモンソン君からお前の身の上で就て相談を受けた、お前はシモンソン君を愛してゐるのか。」

「——はい愛してゐます。」と明瞭答へて「貴下には長くお世話になりましたけど、シモンソンが其様に言つてくれますなら、私、あの人と結婚した方がいゝと思ひます。」

ネフリユドフは絶望の聲悲しく、

「私はこれまでも言つて通り、お前の體を救つた上でお前と結婚しやうと思つてゐた。お前も一時はあんなに怒つたが、併し段々私的心持を解してくれて、二人の結婚といふことが全くの空想でもないやうに見えて來た……が、お前の愛は既に去つた！ そしてこゝで、私の義務も、お前の愛も一緒に終つてしまつたのだ。私はもうこゝに用の無い身だから、今夜にも直ぐ跡へ引返さう。お前の幸福を祈つて置くよ。さやうなら！ カチユーシヤ。」

二歩三歩行きかけた男に、矢庭に取絶つたカチユーシヤは、

「あゝー私、このまゝ貴下とお別れしたくない。何うして私の愛がこのまゝ消えませう！私は貴下を愛してゐます、貴下を強く愛してゐます、愛してゐればこそ、貴下との結婚する事をお断りしたのです！」と聲を放つて泣いた。

其夜は復活祭であつた。遠くの寺で鐘が鳴つた。その鐘の音は十年前と變らぬ響を傳へたのである。

—俊碩抄譯—

戀の須磨子(終)

大正八年二月十日印刷  
大正八年二月十五日發行

【定價金三十五錢】  
【郵税金四錢】

著作權 所有 戀の須磨子 ヤシユチカ		
著者 阿野二夢 東京市本所區元町六番地	發行者 高橋友太郎 東京市神田區松住町五番地	印刷者 菅井十一郎 東京市神田區松住町五番地
印刷所 碓文舎 東京市日本橋區若松町四番地		
發行所 電話浪花四八六二番 振替東京一八〇六番 春江堂		





終

